

「ヤングムスリムの窓」とは？

プロジェクト「ヤングムスリムの窓」では、ダイバーシティや多文化共生を背景に、日本に暮らすヤングムスリムたちの視点＝窓を通じて日本社会はどのように映るのかを明らかにしていきます。ここでのヤングムスリムには、イスラーム圏出身の親を持ち日本で生まれ育った2世やイスラームに改宗した日本人など、様々なプロフィールの若者たちがいます。彼らは宗教を実践しながら、日本で自らを取り巻く人々や社会とどのような関係性を築いているのでしょうか。

このプロジェクトの特徴は、映像メディアを表現手段としてのみならず、一種のハブとして活用し、立場や専門、世代や文化的背景の異なるアクター（ヤングムスリム、映像作家、研究者など）が相互に関わりながら研究／共創を行っているところです。今回の展覧会「ヤングムスリムの窓：撮られているのは、確かにワタシだが、撮っているワタシはいったい誰だろう？」では、学際的なプロジェクトを進める過程における映像の活用方法の可能性を示すとともに、各アクターがそれぞれの関心にもとづいて制作した映像作品を展示します。

プロフィール&展示作品

新明 就太

映像作家／東京藝術大学 非常勤講師、ロンドン芸術大学：セントラルセントマーティンズ純粋芸術科 3D 卒業。大学卒業後から三上有起夫に師事。有限会社ケーブル・スタジオを設立し、ドキュメンタリー作家として活動中。

展示作品：「プロジェクト全体の記録」
(FHD, 約 5 分, 2023 年)

映像作家

アフメド・アリアン

2000 年生まれ。早稲田大学在学の傍らコンサルティング会社を経営。三つの世界＝芸術・経営・学問－のが融合した形でのプロジェクトを考察中。研究分野は金融と哲学。

展示作品：「経済が愛を体現した時」(FHD, 約 10 分, 2023 年)、「僕の顔が、僕のモノになった時」(FHD, 6 分 30 秒, 2023 年)

ヤングムスリム

澤崎 賢一

アーティスト／映像作家。一般社団法人「暮らしのモンタージュ」代表理事。京都市立芸術大学大学院 博士(美術)。近作に、多重層的ドキュメンタリー映画『#まなざしのかたち』(124 分, 2021, 東京ドキュメンタリー映画祭「長編コンペティション部門」選出)など。

展示作品：「#まなざしのかたちヤングムスリムの窓：撮られているのは、確かにワタシだが、撮っているワタシはいったい誰だろう？」(FHD, 30 分, 2023 年)

エルトゥール・ユヌス

1998 年岡山生まれ。江崎グリコ株式会社勤務。慶應義塾大学総合政策学部を卒業。野中研究会 OB。トルコ人の父と日本人の母を持つ。

展示作品：「ムスリム・ミーム」
(FHD, 約 25 分, 2023 年)

長谷川 護

2000 年東京都生まれ。慶應義塾大学総合政策学部 学生。野中研究会「ムスリム共生プロジェクト」所属。2020 年 5 月にイスラームへ改宗。

展示作品：「湯けむりの中で」(FHD, 8 分, 2023 年)

研究者

阿毛 香絵

京都精華大学国際文化学部 特任講師。文化人類学博士(フランス国立社会科学高等研究院(EHESS)・セネガル国立カストンベルジュ大学ダブルディグリー)。

展示作品：「交差(ノマド)する視点」
(FHD, 約 10 分, 2023 年)

野中 葉

慶應義塾大学 総合政策学部 准教授。2005 年慶應義塾大学大学院政策・メディア研究科修士課程修了。2011 年同後期博士課程修了。博士(政策・メディア)。専門は地域研究(インドネシア)。主な関心は、現代インドネシア社会におけるイスラームの受容と広がり。

展覧会

Young Muslim's Eyes

ヤングムスリムの窓



会期：2023 年 2 月 19 日(日)～3 月 4 日(土) 12:00-19:00

会場：京都精華大学サテライトスペース Demachi
〒606-8205 京都市左京区田中上柳町 25-3 京阪出町柳ビル 2F

入場料：無料

参加者：ヤングムスリム(アフメド・アリアン、エルトゥール・ユヌス、長谷川 護)

澤崎 賢一(アーティスト・映像作家／一般社団法人リビング・モンタージュ 代表理事)

阿毛 香絵(文化人類学者／京都精華大学 特任講師)

新明 就太(映像作家／東京藝術大学 非常勤講師)

野中 葉(宗教・社会学／慶應義塾大学 准教授)

企画：澤崎 賢一、阿毛 香絵

主催：一般社団法人リビング・モンタージュ livingmontage.com

共催：ヤングムスリムの窓：芸術と学問のクロスワーク project-y.me.net

京都精華大学 阿毛香絵 研究室 kaeamo.wordpress.com

慶應義塾大学 野中葉 研究室

京都精華大学 アフリカ・アジア現代文化研究センター caaccs.kyoto-seika.ac.jp

京都精華大学・萌芽的研究助成「アジア・アフリカ比較共同研究「現代社会の生活空間における宗教性」」

助成：京都市「Arts Aid KYOTO」補助事業、公益財団法人 花王芸術・科学財団

撮られているのは、たしかにワタシだが、撮っているワタシはいったい誰だろう？



撮られているのは、たしかにワタシだが、撮っているワタシはいったい誰だろう？

いきなり大きく脱線して恐縮だが、「粗忽長屋（そこつながや）」という古典落語がある。粗忽者＝軽はずみでそっかしい者が登場する落語である。ムスリムが登場する展覧会で、何でいきなり落語の話をし始めるのだとお怒りの方もいるかもしれない。書き始めている今のところは、あとでどうにかオチはつけたいと思っているので、しばし我慢してお付き合いいただけるとありがたい。まずは、ざっくりと「粗忽長屋」の内容を説明しよう。

八五郎は、浅草の観音様近くの行き倒れの死骸を、弟分の熊五郎だと思い込み、急いで引き取りにいくよう「当人」（熊五郎）に知らせにいく。八五郎は「浅草の観音様の近くで、おまえが行き倒れになっているから、はやく死骸を引き取ってこい」と言うが、熊五郎は「死んだ気がしない」と答える。しかし、「誰かほかのやつに持っていかれちゃうぞ」と説得され、「当人」として現場におもむく。死骸を見ると、自分より少し顔が長い気がするものの、わが身と納得し、涙ながらに抱きあげる。その瞬間、ふと我に返り、「抱かれているのは、たしかにおれだが、抱いているおれはいったい誰だろう？」と熊五郎はこぼす。

お察しのように、このオチ、「抱かれているのは、たしかにおれだが、抱いているおれはいったい誰だろう？」は、今回の展覧会名「撮られているのは、たしかにワタシだが、撮っているワタシはいったい誰だろう？」に引っ掛けてある。だから何だ？と糾弾するのは、もうしばしお待ちいただきたい。

立川談志(1935-2011)は、この「粗忽長屋」のことを「主観長屋」と呼んでいたことがある。どういうことか。談志は「粗忽長屋」に登場する八五郎と熊五郎はたんなるそっかしい者ではなく、「思い込みの激しい」性格の持ち主だと言っているのである。「思い込んだら命懸け」で、八五郎と熊五郎は話し相手を説得しにかかる。あるときから、談志は「粗忽長屋」ではなく「主観長屋」という題でこの噺を高座にかけるようになった。

さて、ようやく「ヤングムスリムの窓」の話である。このプロジェクトに参加しているヤングムスリムとは、日本に生まれ育ったムスリム2世や途中で改宗した日本人の若者のことを指す。それから、主要なメンバーである文化人類学者の阿毛香絵さんはセネガルの若者たちとイスラーム神秘主義を調査していたし、同じくメンバーのインドネシアで地域研究を行う野中葉さんはムスリムファッションについて研究してきた。このように、この企画の関係者の多くは、イスラームについて造詣が深い。

けれども、この展覧会をご覧になっているあなたは、イスラームのことをどの程度ご存知だろうか。芸術作品の体を成す今回の展覧会の来場者の中には、一定数以上、イスラームとは無縁の方々がきっといるに違いない。なにを隠そう、このテキストを書いている僕自身、「ヤングムスリムの窓」に関わるまで、日本の暮ら

しの中でイスラームに触れる機会はほとんどなかった。

繰り返すが、展覧会に参加しているヤングムスリムたちはムスリムなんだけど、日本の文化の中で生まれ育ってきた。つい最近、日本に暮らす「ムスリムの墓が足りない」というニュースがあった。イスラームでは火葬が禁止されており必ず土葬でなければならないが、土葬の墓が足りないのである。これに対して、「本土に埋めろ」なんていう心ない言葉が投げつけられているのをツイッターで見かけたが、彼らヤングムスリムにとっては、その「本土」が日本なのである。

このように、ひと時代前の日本の常識や倫理観では計りかねる、その多様な生き方が彼らヤングムスリムたちの特徴だからこそ、この展覧会では、ムスリムが同じムスリムに向けて何かを語りかけるだけではなく、これまでイスラームと無縁だった僕のような日本に暮らす人間にとっても、何かしら意味のあるものにしてくちゃいけない。ということが、展覧会を企画するにあたって僕の頭の中に強くあった。でもどうやって？

ムスリムにとって、アッラーは唯一無二、永遠の絶対者である。このムスリムにとっての真実を、ムスリム以外の人たちと共有することは、きつととても難しいだろう。そもそも絶対的な存在ってなに？僕自身よく分からない。このようにムスリムにとって自明なことが、その外側にいる他者にとってはそうではないと感じさせるケースは、おそらく他にもたくさんあるだろう。ヤングムスリムたちの活動を介して日本社会に暮らすムスリムたちの実情を明らかにすることに加えて、そういった他者同士の出会いの場を演出しようというのが、今回の展覧会の趣旨でもある。

だから今回、僕はイスラームとまったく無縁の日本人の鑑賞者を想定して、展覧会について考えた。そんな彼ら・彼女ら外側の視点から見ると、宗教にしる、科学にしる、芸術にしる、何かに向き合ったり表現したり語り合ったりすることに一生懸命な人たちは、みんな「思い込みの激しい人」たちに見えてくるんじゃないか。思い込んだが最後（あるいは思い込んだときが始まり）、僕らは赤ん坊のように世界を見ることができなくなる。世界は、何かのように見えるようになった時点で、それ以外のようには見えなくなるのである。

そうやって開かれていったワタシの世界を他者と共有するためには、発信する側と受け取る側双方の考え方に「揺らぎ」を生じさせるようなユーモアと機知が必要なのではないか。この場面において「思い込んだら命懸け」、談志の「主観長屋」と繋がってくる。なぜって？

つまり、考え方や人間の性質において根本的なものが異なっていて噛み合わない者同士が仮にぶつかり合ったとしても、必死に相手を説き伏せようと対話す

る「主観長屋」の登場人物たちのようなユーモアと機知に富んだ寛容さが大事なんじゃないかということである。どんなに突拍子もないように感じられる状況でも、この地球上では同時に起こりうるのだということへの想像力が大事なんじゃないかということ。

「ヤングムスリムの窓」は、世代、信仰、文化、専門領域などが異なる、さまざまな人物が関わりながら進められている。その大きな特徴は、多様なアクターを結びつけていくために、映像メディアをハブのように活用しているところである。着地点がどうなるかはさておき、映像で作品表現したり、映像を生かして新たな研究手法を考案したり、それから特に、意識しなければ交わることのないバックグラウンドの異なる人たちを結びつけるための映像の扱い方を模索したりと、このプロジェクトは映像を活かしたコミュニケーションの実験場になっている。

ほとんどすべてのメンバーが映像制作を前提として関わっており、撮影主体である本人を含めて、常に誰かをカメラで撮影していて、撮って撮られての関係にある。（自分自身を含めた）対象を観察しつつ、他の対象から観察もされることで、ワタシという主観から見て、何となく当たり前のように感じられてきたことを改めて考え直してみる。

今回の展覧会のサブタイトル「撮られているのは、たしかにワタシだが、撮っているワタシはいったい誰だろう？」とは、こうした状況をあらわす一文であり、このプロジェクトに関わるメンバーそれぞれの主観から立ち現れる関心や問いのズレのようなもののぶつかり合いから生じる「揺らぎ」こそが、他者との共存や多文化共生などと盛んに謳われる現代の状況へのひとつのテーゼとなるのではないだろうか。

というのがマジメに考えた展覧会の意義みたいなものだが、こうやって書きながら「ぜんぜん笑えねえな」とワタシの中に現れるアナタからのツッコミに恥入りながら座を辞さねばならないことに反省しきりである。まだまだ談志の「主観長屋」には遠く及ばない、というのが実情か。

澤崎 賢一
アーティスト／映像作家
一般社団法人リビング・モンタージュ代表理事

■参考文献

立川談志(1999)『新釈落語咄(中公文庫)』中央公論新社
山本益博(2022)「山本益博の ずばり、この落語！お気に入りの落語、その二十三『粗忽長屋』——行き倒れを弟分の熊だと思い込み、その熊に知らせる粗忽な八五郎」
<https://lp.p.pia.jp/article/essay/989/235849/index.html>
国山ハセン(2022)「父の死をきっかけに…『イスラム教徒の墓が足りない』日本の“土葬”墓地の課題を考える」, <https://newsdig.tbs.co.jp/articles/-/243845?display=1>